

特集：子どももの文学の一年

■ 総論

出版不況下の子どももの文学

野上 暁

日本の出版不況は、いまや慢性的ともいえそうで、一向に突破口が見えない。総売り上げも、一九九六年の約二兆六〇〇〇億円をピークに、年々減少を続け、一昨年はついに二兆円の大台を割った。昨年度もさらに前年を下回り、一兆八七四八億円と推定されている。そうなるで一四年連続のマイナス成長ということになる。二〇一〇年はまた、電子書籍元年などと喧伝され、紙の本が消滅するのではな

いかなどと、出版界は色めき立った。近い将来教科書も電子化されるとか、電子出版が子どもの本の将来をどう変えるかと、危機感がささやかれた。そのような中で、一〇月六日に理論社が民事再生法の適用を申請したというニュースが伝えられ、子どもの本の業界に激震が走った。

理論社は、一九五九年に当時としては画期的な創作児童文学シリーズを創刊し、六〇年以降、山中恒の『赤毛のポチ』、今江祥智の『山のむこうは青い海だった』、寺村輝夫の『ぼくは王さま』シリーズ、小沢正の『目をさせせトラゴロウ』、七〇年代には灰谷健次郎の『兔の眼』『太陽の子』はじめ大長編シリーズを刊行するなど、日本の児童文学史に残る作品を数多く出版してきた。つまり、この半世紀にわたって、子どもの本の枠組みを意欲的に拡張し、そのスタンダードを構築してきた出版社であり、日本の児童文学を牽引してきたともいえる。しかも、近年は「よりみちパッセ」の西原理恵子の本が大ヒットしたり、森絵都の『カラフル』の劇場用アニメ化を前に出版されたフォア文庫版が売れたと話題になっていた。その理論社が、実質的に経